

## <動向>

# 関西学院における2023年度のインクルーシブ・コミュニティ実現のための取り組み： 新たなステージに突入した関学レインボーウィークを中心に

武田 丈・澤田 有希子・織田 佳晃・高林 要

昨年度に10周年を迎え新たなステージに突入した第11回の関学レインボーウィーク（KGRW）は、2023年5月15日から19日にかけて開催された。今年度のテーマは「『わたし』とは。『わたしたち』とは。」で、LGBTQ+だけでなく、本学のすべての学生や教職員に自分のあり方を問いかけるプログラムなども実施された。本稿では、この2023年度のKGRWの概要を振り返ったのち、KGRW以外の関西学院における2023年度のインクルーシブ・コミュニティ実現のための活動の進捗状況を報告する。



(制作：大園彩未)

## 1. KGRW2023 のプログラム内容

### (1) オープニングイベント

KGRW2023の初日の5月15日（月）の昼休みには、「より多くの学生にKGRWのことを知ってもらおう、その趣旨を理解してもらおう」という目的でオープニングイベントが西宮上ヶ原キャンパスの中央芝生で開催された。中道院長、土井副学長、澤田人権教育研究室長の挨拶に続いて、レインボーフラッグがはためき、シャボン玉が飛び交う会場で、応援団総部吹奏楽団の有志によって、「自分の個性を否定せず生きればいい」というメッセージのLady GagaのBorn This Wayなどが演奏された。



### (2) パネル展

過去2年に続き、KGRWの開催の前週の月曜日（5月8日）から2週間にわたって3キャンパ

スで開催されたパネル展では、例年通り教職員からのメッセージ、いのちリスペクト、過去のWEB調査の結果概要に加えて、これまでの関学レインボーウィークの歩みを紹介するパネルが展示された。閲覧者からは、以下のようなコメントをいただいた。

性についての悩みの実態を知る機会があまりないので、分かりやすくまとめられていて良かったです！関学内でも取り組みがされていることを知って驚きました。性の区別が薄まってきている今日、より多くの人が自分の性別に違和感を感じずに生活できる世界になればいいなと思いました。

みんながみんな人間のこと愛するっていうメッセージがしんどい人もいるかな～

### (3) LGBTQ + 関連図書等の展示

例年、西宮上ヶ原キャンパスの図書館で実施してきた関学図書館企画のLGBTQ + 関連図書の展示は、今年度は西宮上ヶ原に加えて、西宮聖和と神戸三田の各キャンパス図書館でも、KGRWが始まる以前の5月1日（月）から5月31日（火）にかけて実施された。さらに、高等部図書館でも同じ期間、千里国際キャンパスでは5月8日から19日にかけて開催された。一方、西宮聖和キャンパスの関西学院子どもセンターの「おもちゃとえほんのへや」では昨年度に続き、「多様性社会を考える（SDGs 絵本）」と題したLGBTQ + 関連絵本の展示を5月8日から6月8日にかけてしていただいた。

### (4) 映画ウォッチパーティ企画（学生企画）

5月15日（月）の20時から22時にかけては、KGRW初の試みとして映画ウォッチパーティ企画が開催された。もとよりKGRWは大学公式のイベントであるものの、限られた予算のなか、ごくごく少数の教職員による多大な努力と、院生を

含む学生ボランティアでまわしているという実情がある。そのため、上映会として開催するハードルは高く、毎年どうしても上映を断念せざるを得ない作品が多数あった。一方で、この機会にLGBTQ+に関連する映画を鑑賞したいというニーズが存在したことから、院生によってこの度のウォッチパーティが企画された。

今回は、Amazonプライム・ビデオにて映画『ムーンライト（Moonlight）』（Barry Jenkins, 2016）を鑑賞しながら参加者同士がチャットをするという形式で開催し、7名が参加した。参加者個々人のサブスクリプション加入が参加条件になってしまうという課題はあるものの、コミュニケーションをとりながら映画鑑賞をすることができるという点が好評であった。

### (5) ランウェイショー（学生企画）

5月16日（火）13時20分～14時20分にかけて、“Time to face yourself～「あなたの世界」を表現するランウェイ～”と題して、学生企画のランウェイショーが関学会館光の間において実施された。参加者は40名であった。ショーのコンセプトは「真っ白な画用紙」。何の変哲もない画用紙に出演してくださる方の個性や思い、表現したい色や形を自由に描いていただき、ショーを通して一つの作品をみんなで作り上げる、というものであり、6名の学生がそれぞれのテーマと衣装を各自で準備して出演した。照明や音楽、映像を用いて、それぞれの個性や思いを表現していた。出演者6名のテーマとコンセプトは次ページの表の通り。

### (6) 東海林毅監督 人権問題講演会&映画上映

5月16日（火）の15時10分から16時50分にかけては、昨年度のKGRWでも上映したトランスジェンダー女性の生きる姿を描いた映画『片袖の魚』（2020年制作/34分）の上映会後に、「トランスジェンダー役を当事者の俳優に」を実践し感じたこと、見えてきた課題などについて本作の

出演者	テーマ	コンセプト
ありさ	「自由」	留学経験から人目を気にせず、好きな服を着ることが出来ない日本の窮屈さを実感。自由になりたい、自由でいたいという想いからテーマを選択した。自由を象徴する青色や鳥を基調とし、窮屈さを感じない服を着用して「自由」を表現した。
みわ	「愛」	児童養護施設でボランティアをする中で、彼らが愛を表現することが難しいということに気付く。自分の愛を素直に表現出来たら全員がもっと幸せになれるのでは？と考え、テーマを選択した。どのように愛を表現するか考えている中でクリムトの接吻という作品に出会い、この作品の特徴である黄色をモチーフに「愛」を表現した。
大沢映介	「サステナブル」	環境問題の解決に取り組む学生団体に所属しており、モノを大切にすることを心掛けている。その中でもファッションには流行り廃りがあり、トレンドに流されない気持ちを元々あるものだけで表現をしたいとテーマを選択した。全身古着を着用しており、ジャケットは祖父から、アクセサリは母からもらった物を組み合わせて「サステナブル」を表現した。
mei	「もう一度」	幼少期から15年間ピアノを習っており、その度にドレスを着用して出場していたが、辞めてからは着る機会がなくなってしまった。最後のコンクールで着用していたドレスを最後にもう一度着用したいとテーマを選択した。最後のコンクールで演奏した思い出深い自作曲と共にピアノへの思いを込めた。
はづき	「2022 夏」	アイドルコピーダンスサークルに所属しており、年間10着以上の衣装を自主制作している。以前出場予定であった決勝に敗者復活戦で破れたため出場できず、披露する場所がなくなってしまった衣装があり、それが偶然にも初めて彼女が製作した衣装であった。一度だけでもその衣装を着用したいという想いからランウェイショーでの披露を決意した。
高尾晃太郎	「NINJA」	元々服がとても好きでファッションには興味関心があった。ショーに出るにあたってキャラクター性を持たせ、自分だけでなく見ている観客も楽しめるような雰囲気づくりを心掛けるため日本を代表する「忍者」とテーマを選択した。テーマ通り忍者を代表する黒色で服を統一しつつも、ファッション好きとしてシルバーの靴を着用し、細部にまでこだわった。

映画監督である東海林毅氏にお話しいただいた。講演の詳細については、『KG 人権ブックレット』第30号を参照されたい。会場である西宮上ヶ原キャンパス中央講堂では85名の方に、オンライン（Zoom ウェビナー）による同時配信では129名の方にご参加いただき、参加者からは以下のような感想が寄せられた。

私の中でマイノリティなジェンダーを持つ人、特にゲイやトランスジェンダーの人は何となく人格者であるというイメージがありました（メディアの影響で）。ですが、東海林さんが「〇〇な人」と思うこと自体が偏見であるとおっしゃったことや、映画の主人公をとりまく社会の素朴な雰囲気を感じて、自分の中で感覚が変

りました。というか、入らなくていい肩の力が抜けたような気がしました。よりフラットな目線でこれからジェンダーについて考えることができると思います。

「片袖の魚」を見て、性的マイノリティと地元というよくある問題であると同時に、その背景にある性自認や性的指向に気がつく（またはトランス治療をはじめると）前の自分と後の自分の心理的、身体的変化が繊細に描かれていたと思います。私自身はシスジェンダーのクィアとして生きていますが、マイノリティ当事者であること＝「すべての人に差別にならない」という訳ではないと日々実感しています。当事者のポジティブアクションとして表象の現場で実践されている東海林さんのお話を聞くことができて良かったです。

「シスジェンダー基準のティピカルな(シスノーマティブな) トランスジェンダー像を求めている自分」という部分で、私はまさしくこれに当てはまっているとハッとしました。私もLGBTQ関係の作品を見ると、自分が考える像を見ようとしていたと気付くことができました。オンラインではなく、直接参加し、講演会を生で聞くことができて本当に良かったです。

#### (7) 映画『最も危険な年』上映会

5月17日(水)の13時30分からは、2016年米国ワシントン州でトランス嫌悪からトランスジェンダーの人たちのトイレ利用を制限する法案が議論される中、トランスジェンダーの子どもたちの未来と命を守るために闘う親たちの姿を追ったドキュメンタリー映画『最も危険な年』の上映会が開催された。西宮上ヶ原キャンパス図書館ホールでは約25名が、神戸三田キャンパスのII号館101号教室では約500名が視聴し、参加者からは以下のような感想が寄せられた。

最も危険な年を視聴して、シスジェンダーとして生きる自身の特権性に気付かされました。日本の現状について危機感を抱くと同時に、面に立って活動する当事者とその家族に感謝を伝えたいです。

私が今まで感じていたことが覆させるような感覚になることがあり、今まで持っていたトランスジェンダーのイメージというものに対する見方が変わったと思う。私が女性として生きられているように、それぞれの人が自分らしく生きられるように社会が変わればいいと感じた。

トランスジェンダーの人に対してネガティブな印象を持っているわけではないが、トイレや脱衣所などプライベートな空間の話になると理解するのが難しく感じた。この問題の構造はシンプルだと思うが解決するのはかなり難しいように感じた。

何年前の私は、絶対トランス女性が女子トイレを利用してはいけないと思っていました。しかし、今まで多様なSDGsの授業を受講した後、若干の思想的概念が変わりました。彼らの意見も尊重する必要があると思います。トランス女性は犯罪を犯すために自分の性を変ったのではなく、自分のアイデンティティを取り戻すために女性に変わったのです。多くの人々が色々な意見、言論が合わせている焦点をしっかり把握する必要があると思います。

とても興味深いテーマでした。映画鑑賞中、終始頭を働かせながら自分の考えを整理していました。非常に難しかったです。私の意見としては、トランスジェンダーの方とトイレに異性の体が入ってほしくない方々が争うのは間違っていると感じた。トランスジェンダーの方が問題を起こすということは少ないと感じるし、問題なのは性犯罪を犯す人であり、トランスジェンダー

との関係はなく、議論の対象が違うのではないかと考えたからだ。

#### (8) 交流会

性的マイノリティの当事者、もしくは当事者かもしれない学生たちを対象とし、互いに交流することを目的とした交流会は、過去3年間は新型コロナウイルスの影響でオンラインのみで開催されたが、今年度はオンラインでの交流会に加えて、対面での交流会も開催された。オンラインでの交流会は5月17日（水）の20時から22時まで実施され、5人が参加した。対面での交流会は5月19日（金）19時から21時まで西宮上ヶ原キャンパスで実施され、9人が参加した。それぞれの交流会は関学非公認の学生LGBTサークルCassisと非営利活動団体Q-Losikによって企画され、グラウンドルールを設けたうえで実施された。様々な学生が参加し、会話を楽しみながら交流を深める機会となった。

#### (9) パネルディスカッション

関学非公認の学生LGBTサークルCassisと非営利活動団体Q-Losikが共同で企画・実施した、以下のテーマに関するパネルディスカッション（トークセッション）が二日間にわたって開催された。

5月18日（木）@西宮上ヶ原キャンパス 図書館ホール

13:20～15:00『マンガを通して語るセクシュアリティとジェンダー規範』（参加者数：23名）

17:00～18:40『トランスジェンダー 手術や戸籍変更までの道のり』（参加者数：17名）

5月19日（金）@西宮上ヶ原キャンパス 図書館ホール

9:00～10:30『日本の同性婚と世界の状況』

（参加者数：17名）

11:00～12:40『ゲイ・バイ学生のリアル』

（参加者数：16名）

13:20～15:00『今更聞けない!! LGBTQって何???』（参加者数：18名）

17:00～18:40『性の多様性と人権教育』（参加者数：21名）

「マンガを通して語るセクシュアリティとジェンダー規範」では、『違国日記』（ヤマシタトモコ）を題材にして、さらに調査結果や文献を交えながら男女二元論、カミングアウト、異性愛規範（ヘテロノーマティビティ）、マイクロアグレッション、アウトイング、同性婚、LGBTQ+の自殺のリスク、LGBTQ+の家族関係、ノンバイナリー、モノガミー／ポリアモリー、男らしさの呪縛（①国家と市民社会での役割期待、②女性の役割との対極性）といった用語や概念が分かりやすく説明された。

「トランスジェンダー 手術や戸籍変更までの道のり」では、講師が小学生の時から性別違和をいだし高校生の時に性同一性障害の診断を受けホルモン注射や手術を受けてトランス男性として生活するようになるプロセスを語ると同時に、「男らしく生きることでもまた縛られる苦悩」、そして性別にとらわれずXジェンダーとして生きようと決意するようになったライフヒストリーが語られた。

「日本の同性婚と世界の状況」では、ゲイの講師たちが「パートナーといっても友だちとみられる」、「ゴールのない関係」、「家族との関係：結婚しろと言われる」、「恋愛感情を隠して生きる辛さ・悲しさ」といったゲイカップルの苦悩を紹介し、その一つの解決策である「同性婚」について解説を行った。特に、人口の65%をカバーしているパートナーシップ制度は法的拘束力がなく、パートナーシップ制度ではカバーできない課題を紹介することで同性婚の必要性が語られた。

「ゲイ・バイ学生のリアル」では3人の講師から、

小学生や中学生時代における性的指向の自覚、自覚した後の自身の変化、友人恋愛関係での困りごと、「他人の性別で態度を変えない」や「ネットで知り合うことが多いので、全国各地に知り合いができる」といったゲイ・バイセクシュアルでよかったこと、カミングアウト、SNS、そして同性婚や子育てなどについての想いが語られた。

「性の多様性と人権教育」では、LGBTQ + 当事者の学校で直面する課題とともに、そうした現状に対して文部科学省が2015年および2016年にだした指針を紹介するとともに、特定の授業でセクシュアリティの多様性を教えることから、学校全体でセクシュアリティの多様性があることを前提ですべての授業において異性愛を前提としない教育の必要性が語られた。

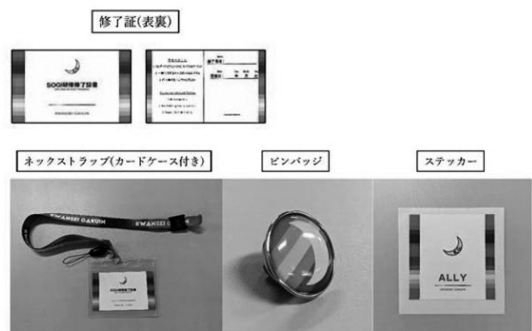
## 2. 2023年度のインクルーシブ・コミュニティ実現のための取り組み

前号で報告した希望する教職員対象のSOGI研修は、昨年度の2023年2月20日に17名の教職員が参加して第1回目の研修が開催された。研修修了者に対しては修了証が授与されたが、アライの可視化のために修了証を入れるレインボータグのネクストラップ、ピンバッジ、ステッカー（以下の写真参照）のための予算が昨年度内には認められなかった。しかし、今年度に入ってから予算が承認され、今年度の4回の研修の修了者とともに、昨年度の修了者に対しても遡って提供することとなった。今年度の4回の研修は7月1日（土）と8月9日が対面（西宮上ヶ原キャンパス）でそれぞれ9名と19名が、11月18日と28日はオンラインでそれぞれ8名と17名が参加して開催された。この教職員対象の研修についてはkwicでのアナウンスに加えて、学部長会で今津屋副学長から各学部で参加を呼びかけるように各学部長にお願いしていただいたが、参加者は限定的であった。来年度に向けて参加者を増やす工夫が重要となってくる。また、キャンパス内のアライの

可視化ではなく、最低限の知識を身につけてもらうためのすべての職員に受講してもらうSOGI研修の開催の可能性を、学内に今年度から設置されたD & I (Diversity & Inclusion) 課およびダイバーシティ推進本部と協議中である。一方、学生に対するSOGI研修も、来年度のKGRWの実行委員会へ参加希望している学生に対して9月25日に開催した。この研修をベースにして来年度は教職員だけでなく、学生のアライを可視化するための希望学生対象のSOGI研修も現在開発中である。



(2023年7月1日に開催されたSOGI研修の様子：講師は吉川ヒロ氏)



(アライ可視化のために研修修了者に提供されるグッズ)

インクルーシブ・コミュニティ推進協議会は、2023年5月27日（土）に2023年度の第1回の協議会が開催され、幼稚園から大学までの各学校の今年度のインクルーシブ・コミュニティ実現に向けた取り組みの目標が共有された。2023年度の第2回の協議会は2024年3月23日（土）に開催予定で、今年度の各学校の活動報告を行う予定である。

2020年度に第1弾として発行した本学の6人のLGBTQ+の卒業生のライフストーリー集は在学中の体験および就活を中心としたものであったが、カミングアウトに焦点をあてた本学の5人のLGBTQ+の卒業生の第2弾のライフストーリー集が、2023年3月に人権教育研究室のHP ([https://www.kwansei.ac.jp/r\\_human/r\\_human\\_000391.html](https://www.kwansei.ac.jp/r_human/r_human_000391.html)) で公開された。印刷物として2024年3月末に発行予定である。

前号で紹介した全学版の「教職員のためのSOGIガイドライン&学生用SOGIガイドライン」であるが、学長室で最終的な文言チェックがされており、年度末には公開される予定である。前号でも指摘したが、今後はどのような形でこのガイドラインを教職員および学生たちと共有し、またそのガイドラインに基づく配慮や対応を徹底していくかが重要になってくる。

昨年度に引き続き、関西レインボーフェスタ(2023年10月7日-8日@扇町公園)では「関学レインボーウィーク&SOGIE研究班」としてブース出展しWeb調査の報告や、LGBTQ+の卒業生のライフストーリー集やレインボーウィークのリーフレットの配布などを行った。

最後に2015年度より、授業期間中の昼休みに週に1~2回程度開催してきたランチ会(SOGIEに関して関心のある学生を対象)であるが、新型コロナウイルスの影響に加えて、本学の昼休み時間が50分から40分に短縮された影響で、今年度の春学期には参加者がほとんどいない状況となってしまった。そこで、秋学期からはランチ会に代わって「KGレインボーカフェ」を授業の一

マ分(100分)で開催することとした。第1回は2023年10月11日(水)の5限(17時から18時40分まで)開催し、SOGIEの基礎知識、関学の取組紹介、Cassisの紹介をアットホームな雰囲気で行った。第2回は11月20日(月)の5限に「推しの話からジェンダーやセクシュアリティの話まで、フリートークを楽しむ会」、第3回は12月1日(金)の5限に「シュトレインを食べながらのんびり過ごす会」、第4回は12月11日(月)5限に「ミサンガを作りながらのんびり過ごす会」、第5回は12月20日(水)に「ボードゲーム等を楽しみながら、趣味や大学での話、もやもやすることなんかをゆるやかに話そう!」というテーマで開催した。